岡山大学大学院文化科学研究科紀要第16号（2003.11）

聞き手を情報源とする文末の引用形式について

金　　善眞

1．はじめに

文末の引用形式は，その情報がどこから発せられたものとして話し手に想定されているかという情報源の観点から，三つに分類できる（金（2001））。この論文では，そのうち，聞き手を情報源とする文末の引用形式の用法・機能について記述する。

聞き手を情報源とする場合の文末の引用形式の用法として、今までは主に〈問い返し〉の用法が注目されてきた。仁田（1987）によれば、〈問い返し〉とは、「不明な部分が、言語表現としての相手の発話は了解してはいるものの、その真意、意味するところが把握しかねるというあり方で、相手の発話に存在し、その不明な所を相手に問い返すといった疑問表現（p.184）」である。そして「〈問い返し〉には、相手の発話の先行が前提になり、相手の文および文の一部を繰り返すことによって行われる」とある。〈問い返し〉の形式としては、何もつけないものと次のように「ッテ」がつくものがあるとされているが[1]、もう一つ、〈問い返し〉の用法を持つ文末の引用形式として「トイウト」も考慮に入れる必要があると思われる。

（1）「いつ出ていらしったの？」
　　「いまです」
　　「いまって？」
　　「いま東京駅へ着いて、やって来たんです」　（あす）

（2）「行助は、なにか要求していましたか？」
　　と理一は弁護士の話をきき終ってから訊きかえした。
　　「要求といいますと？」
　　まだ三十歳前後と思われる弁護士は怪訝な目を見せた。
　　「たとえば財産とか……」
　　「移籍さえ認めてくれればよいと言っていました」　（冬旅）

（1）と（2）は典型的な問い返しの例だといえる。しかし、聞き手を情報源とする「ッテ」の用法には次のようなものもある。

1　安達（1989）によれば、「問い返し疑問」の形式には、「何もつけないもの／「ッテ」、「ダッテ」という引用形式を付けるもの」がある。

（3）永尾「やっぱさ、おまえみたいな派手なのと付き合ったのが間違いの元だった」
三上「“やっぱり俺が付き合うべきだった”って？」
永尾「そうそう」　（東京）

（3）の「ッテ」の文は、聞き手の発話そのものに不明な所があって発せられたものではなく、聞き手の態度から話し手が想定したことを聞き手に問いかけるためのものである。文末の「ト」も（3）と同じような働きをすることがある。次の例がそれである。

（4）「誰だって、昔の仲間に会いたくなる時って、あると思うんだ。それなのに、あえて誰にも連絡先を教えてないんなら、それなりの理由が何かあるんじゃないのかな」
「その時の仲間の中に、どうしても会いたくない者がいるからだと？」
「そうとは限らないけど。――でも、きっとわけがあるんじゃないかな。あたしはそう思う」　（奇跡）

「ッテ」と「ト」は、幾つかの面において異なった振舞いを見せるが、それについては後述する。

そして、次のように「トイウノカ」も、（3）、（4）のように話し手が聞き手の態度から想定したことを問いかける用法を持っている。

（5）「くわしくお話したいんですが、扉をあけてもらえますか？」
「このままじゃ話せないってのか」
「重要な要件ですから。それに、あなたもモニターをみていないと不安でしょう？」
（催眠）

本稿では、文末に用いられる引用形式の中で、聞き手を情報源とすることができる「ッテ」、「ト」、「トイウト」、「トイウノカ」をとりあげ、その機能を考察していきたい。

2．先行研究

文末の「ッテ」の問い返しの用法については、多くの先行研究が取り扱っているが[2]、聞き手を情報源とする「ッテ」の用法を分類したものとしては守時（1994）がある。守時（1994）は聞き手を情報源とする「ッテ」の用法を、「～ッテ」の「～」の部分がすでに述べられている場合については「言葉自体の意味や発話意図を尋ねる」、「～」の部分が述べられてはいないが、聞き手の発話が情報源と推定される場合については「話し手は聞き手が言ったことを「～」のように理解している、その理解の妥当性の判断を聞き手に委ねている」と述べている。引用文が聞き手の発話から引かれているか、話し手によって推定されたかということは「ッテ」の、聞き手を情報源とする場合の機能を考えるに当たって有効だと思われる。本稿では守時（1994）の指摘を受け入れながら、聞

2　安達（1989）、守時（1994）、三枝（1997）、許（1999）、野村（2000）など。

き手を情報源とする「ッテ」の用法についてもっと詳しい考察を行いたい。

「トイウノカ」の聞き手を情報源とする用法についての先行研究としてはメイナード（1994）がある。

（1）「犯人はお屋敷の人だというんですか。やめてください！……」－歌野（1992）

（p.81メイナード（1994））

メイナード（1994）は、「トイウ」表現の一つの用法として上のような例をあげている。メイナード（1994）はこのような例を想定引用といい、想定引用とは「実際には発言していない表現を発言したかのように相手にかわって引用を通じて言語化する表現」と定義づけている。本稿ではこのような例を「トイウノカ」という形式の用法として注目したい。

3．本稿の考察対象となる引用構文の引用的側面について

聞き手を情報源とする引用構文の中、主として、文末に「ッテ」、「ト」、「トイウト」、「トイウノカ」などが用いられた文が本稿の考察の対象であるが、これらの文は、藤田（2000）のいう「第Ⅰ類[3]」のバリエーションと考えられる。典型的な引用構文との関わりを構文構造と場の二重性との二つの面から考察したい。

聞き手の先行発話から引かれた情報が引用文にもりこまれる場合と、話し手によって聞き手のものと想定された情報が引用文にもりこまれる場合とでは、引用的な側面において内容が少々異なるが、どちらも「第Ⅰ類」のバリエーションと考えることができる。

3－1．聞き手の先行発話から引かれた情報が引用文にもりこまれる場合

「ッテ」と「ト」の問い返しの用法は、「第Ⅰ類」の引用構文の構文構造からみれば、主格補語と述語が欠けているが、「第Ⅰ類」の引用構文と同じように引用文が成立する場が引用構文の成立する場より先行するという場の二重性を持っている。

（1）「いつ出ていらしったの？」

「いまです」

「いまって？」

「いま東京駅へ着いて、やって来たんです」　（あす）

3　「第Ⅰ類」とは、次のような構文構造を持ち、「述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す」という特徴を有する。

「　私は	「明日学校に行く」	と	言った　」
主格補語	引用句	引用助詞	（引用）動詞

（藤田、2000）

（2）「行助は、なにか要求していましたか？」

と理一は弁護士の話をきき終ってから訊きかえした。

「要求といいますと？」

まだ三十歳前後と思われる弁護士は怪訝な目を見せた。

「たとえば財産とか……」

「移籍さえ認めてくれればよいと言っていました」　（冬旅）

（6）「傷？」私は一瞬めんくらったが、彼を安心させるために背中を叩いてやりながらいった。

「大丈夫だ。僕は無事だよ。」

「無事だと？」彼は血がこびりついている歯をむいて、あえぎながらいった。「無事だと？ばかいえ。俺がやられたのに、貴様が。こんなことって、あるか。」　（忍ぶ）

〈「第Ⅰ類」の場の二重性〉

（7）私は「明日学校に行く」と言った。

⇒　「明日学校に行く」　「私は「明日学校に行く」と言った」

引用文が成立する場（元発話の場）　**引用構文が成立する場（引用構文発話の場）**

〈問い返しの用法においての場の二重性〉

（1）「いまです」　「いまって？」

（2）「行助は、なにか要求していましたか？」　「要求といいますと？」

（6）「僕は無事だよ」　「無事だと？」

引用文が成立する場（元発話の場）　**引用構文が成立する場（引用構文発話の場）**

3－2．話し手によって聞き手のものと想定された情報が引用文にもりこまれる場合

この場合、引用文には聞き手の発話または態度をもとに話し手が想定した情報がくる。聞き手の発話・態度は「引用文想定の元となる場」として「引用構文の成立する場」より先行するので、「第Ⅰ類」の引用構文と場の構成は似ているといえる。とくに「トイウノカ」の文は「第Ⅰ類」の文とほぼ変わらない構文構造をなしている。（8）、（9）は聞き手の発話または態度から話し手が想定した情報が引用文にもりこまれている例である。

（8）「証人なんてなんとでもなる。物的証拠はあるんですか？」

「ありません」

「……」

「でも、あったはずなんですよ。飛行機のチケットの半券……。電話では古田くん、持ってるって言ってたんですよ。矢口さん、みませんでした？」

「見るわけないでしょ」

「じゃ、誰かが捨てたのかな……」

「久利生検事、あなたはどうしても古田は犯人じゃないというんですか」

「矢口さんもそう思ってんでしょ？」 (hero)

（8）'あなたは　どうしても古田は犯人じゃない　と　いうんですか」

主格補語　引用文　引用助詞　引用動詞

（9）さとみ「色んなことがあったけど――でも、きっとみんないい思い出になるよね」

三上「――」

さとみ「――」

三上「ハッキリ言えよ」

さとみ「――」

三上「別れるって言うのか――」 (東京)

（9）'（あなたは）　別れる　って　言うのか

主格補語　引用文　引用助詞　引用動詞

「トイウノカ」の文は（8）のように主格補語相当の語句が明示される場合もあり、（9）のように明示されない場合もある。しかし、明示されない場合でも（9）'のように「あなた（は）」などの二人称名詞を補って言うことができる。一方、「ッテ」と「ト」の文は主格補語と引用動詞が欠けている。

（2）永尾「やっぱさ、おまえみたいな派手なのと付き合ったのが間違いの元だった」

三上「“やっぱり俺が付き合うべきだった”って？」

永尾「そうそう」 (東京)

（2）'“やっぱり俺が付き合うべきだった”　って　？

引用文　引用助詞

〈「第Ⅰ類」の場の二重性〉

（7）私は「明日学校に行く」と言った。

⇒　「明日学校に行く」　「私は「明日学校に行く」と言った」

引用文が成立する場（元発話の場）　**引用構文が成立する場（引用構文発話の場）**

〈「話し手によって聞き手のものと想定された情報が引用文にもりこまれる場合」の場の二重性〉

（2）永尾「やっぱさ、おまえみたいな派手なのと付き合ったのが間違いの元だった」

三上「“やっぱり俺が付き合うべきだった”って？」 (東京)

（4）「くわしくお話したいんですが、扉をあけてもらえますか？」

「このままじゃ話せないってのか」 (催眠)

⇒　（2）「やっぱさ、おまえみたいな派手なのと付き合ったのが間違いの元だった」　　「“やっぱり俺が付き合うべきだった”って？」

（4）「くわしくお話したいんですが、扉をあけてもらえますか？」　　「このままじゃ話せないってのか」

引用文想定の元となる場　　**引用構文が成立する場（引用構文発話の場）**

4．「ッテ」、「ト」、「トイウト」について

聞き手を情報源とする「ッテ」と「ト」、「トイウト」が用いられた文は基本的に疑問文の形をとるが、その機能はさまざまである。問いかけ性を有する〈問い返し〉の用法は、先行研究でも論じられているように疑問文として働くが、問いかけ性が薄くなり、聞き手の発話または態度に反する話し手の気持ちを表す用法になると、述べ立ての文に近くなる。

4－1．問い返しの用法

〈単なる問い返し〉

(10)「君に勇気がなかったことを、きっとたくさんの人が感謝するよ」
「たくさんの人って？」
「君のことを、愛してる人たち」　（オーバー）

(11)「…前略…歴史をさかのぼって、ヨーロッパの国々のいろんな時代の出来事にぶつかって、ぼくはあることに気づいたんだよ」
「あることって？」
「つまり、（もし）っていう問題なんだ。…後略…」　（ドナウ・上）

(12)「男の人は、どんな感じの人でしたか？」
「どんな感じといいますと？」
「たとえば、ならず者みたいだったとか……」　（ドナウ・上）

この用法は、話し手が聞き手の発話の中で、もっと詳しい情報が必要と思われる部分があるとき、その部分を取り上げ、問い返す用法である。「トイウト」は、話し手と聞き手との関係によって、「トイウト／トイイマスト／ト仰ルト／ト申シマスト」のような敬語体も用いられる。

「トイウト」は（12）のように文末に用いられる以外にも、次のように聞き手の発話の直後に位置し、単独で用いられ、接続詞のような働きをするときもある。

(13)「恐ろしい話だ、古畑さん。列車の中で殺人事件が起こるなんて」

「しかしもっと恐ろしいことを私は知っております」

「といいますと」

「犯人はおそらくまだ、この列車の中にいます」　（古畑）

現われる位置さえ異なるが、(13) のような「トイウト」も〈問い返し〉の「トイウト」に近い機能を持つ。聞き手の先行発話から十分な情報が得られなかったとき、もっと詳しい情報を要求するために用いられるのである。

単なる問い返しの用法は「ト」にはない。「ト」は、名詞述語文と形容詞述語文を前接させるためには、「ダト」という形を取るが[4]、「ダト」は、単にもっと詳しい情報を要求する問い返しの場合には用いることができず、次のように話し手にとって、聞き手の発話がそのままでは、受け入れ難い場合にのみ用いることができる。

〈話し手が聞き手の発話を受け入れ難い時に用いられる問い返し〉

(1) 「いつ出ていらしったの？」

「いまです」

「いまって？」

「いま東京駅へ着いて、やって来たんです」　（あす）

(14) 「でも、安心してくれないかな。誤解はとけて、もう自由になったところなんだ」

「自由って。じゃあまるで逮捕でもされたみたいじゃない」　（奇跡）

(15) 「みんなで一緒に行けばいいじゃないか」

「みんなでですって？」

麻沙子の大声で、まわりの客たちの喋り声が一瞬途絶えた。　（ドナウ・上）

(16) 「ヴィンツァーだよ。バリエルン州の、ドナウ河のほとりの村だ」ニュールンベルク・ソーセージを口に入れかけていた麻沙子は、驚いてフォークを皿の上に戻した。

「ヴィンツァーですって？」

「うん」

「冗談じゃないわ。ヴィンツァーはレーゲンスブルクのまだもっと先じゃないの。…後略」

（ドナウ・上）

(17) 「かなりケッコウな手がありますわ、長官。大至急、小説家をさがしだしてくださいません？」

「小説家だと？」

「欲をいえば、盗作の天才がいないかしら？」　（ブン）

4　動詞述語文を前接させる時にも「ダト」の形を取ることがある。

(18) 「いったい、あなたはなぜ私にそんなことを訊ねるんです」
「あなただと？」影村はむっとしたような顔でいった。先生といわずにあなたといったことが影村には不愉快に思えたにちがいない。（孤高）

この用法は、聞き手の発話の中で話し手にとって受け入れがたい部分がある場合に用いられる。形式としては、「ッテ」、「ダッテ／デスッテ」、「ダト」などがある[5]。

純粋にもっと詳しい情報を要求する（10）、（11）、（12）のような例は聞き手に応答を要求する疑問文として働くが、（1）や（14）～（18）のように話し手が聞き手の発話を受け入れがたいと思った時に用いられた問い返しの文は、聞き手に応答を要求する疑問文としての働き以外にも、聞き手の発話・態度に反する気持ちを話し手が持っていることを表す働きも併せ持っていると思われる。

〈疑問詞が用いられた問い返し〉

問い返しの用法には次のようによく聞き取れなかった部分を疑問詞に変えて問い返す用法もある。

(19) 私はもう一度、ニューオリンズへボクシングの試合を見に行くのだ、と繰り返した。「誰の？」「モハメッド・アリ」「誰だって？」老人は訊き返してきた。モハメッド・アリ、モハメッド・アリ、と私は大きな声で言った。英語風にムハマッド・アリーと発音してみたが、それでも通じない。（瞬上）

(20) 勝男「（気を削がれて）あ？」
坂東刑事、緊張した面持ちで畳に手をつき――　坂東刑事　「お嬢さんを下さい」
勝男「（聞こえなかった）何をくれって？」と、振り向く。
坂東刑事「（もう一度勇気を出し）はい、お嬢さんを」
勝男「飛鳥のことか？」（ス4）

(21) 営庭に整列して、「病気の者、前に出ろ！」と言われたとき、おずおずと隊列を離れた数名にまじって、彼もまた一足遅れて前に出た。軍医のまえで彼は懸命に口を開き、最初に肺浸潤の名を、それから一念こめて脊髄性進行性筋萎縮症の名を言った。
「なに？なんだと？」
「脊髄性進行性筋萎縮症と大学で言われました」
「筋萎縮だと？どれ見せろ」（楡下）

(19) ～ (21) は聞き手の発話がよく聞こえなかったり理解できなかった場合、その不確かな部分

5　本稿では「ダッテ／デスッテ」、「ダト」を個別の形式として扱わず、「ッテ」、「ト」の形式的なバリエーションと考える。その理由は、第三者を情報源とする「ダッテ／デスッテ」と、本稿での聞き手を情報源とする「ダッテ／デスッテ」とを区別し、別の形式と考えるからである。

を疑問詞に変えて問い返す用法であり、応答が要求される。

このように疑問詞が用いられた「ッテ」と「ト」は、話し手が単に聞き手の発話を明確に把握できなかった場合には問い返しの用法になるが、聞き手の発話を明確に把握した上で使われると次のように反問になる。

4－2．反問の用法

(22) 「会社ですけど。どなた？」
「総務の者です。ご主人は出社されておりませんが」
「何ですって？」
「休暇という連絡がなかったのでお電話をさし上げたんですが」
「あのね、ちょっと」
夫が出社していない、というのも気になったが、それよりも相手の言い方に腹が立った。
「あなた会社の人？社長の家へ電話をして、〈ご主人〉とは何よ？」 （女社）

(23) 「四万五千円になります」
「四……万？」孝造が目を丸くした。一度に酔いもさめてしまう。
「そ、そんなべらぼうな！」
「何よ、ケチつける気？」
「い、いや……しかし……そんなに持ってねえ」
「何だって？おい、ふざけんじゃねえよ」
ホステスが目配せすると、すぐにカウンターの奥からアンチャン風の男が出て来て、ぐいと孝造の胸ぐらをつかんだ。 （女社）

(24) 「理由をおきかせ願いたい」
「退屈だったからさ」
「何ですと？」
「なるほど。これでは、当分、嫁にも行けまい。おもったより、ひどい牝馬だ」 （剣客）

(25) 「尾島君はおるかね？」と男の太い声。
「尾島――でございますか？今、社長は桑田と申しますが」
「何だと？そこは尾島産業だろう？」
「さようでございます。――どなた様でしょう？」 （女社）

反問の用法にも問い返しのように疑問詞が用いられる。(22) ～ (25) のように話し手が聞き手の発話を明確に把握した上で疑問詞が使われると反問になる。この場合、聞き手に対する応答の要求度は〈問い返し〉の用法の文より落ちると思われる。反問は、聞き手に応答を要求する疑問文

と、話し手が聞き手の発話・態度に反する気持ちを持っていること述べる述べ立ての文との間に存在する文である。

問い返しと反問は容認される疑問詞に違いがある。問い返しの用法では場合によって色々な疑問詞がくることができる。明確に聞き取れなかった事柄に応じてほとんどの疑問詞が使われる。しかし反問の用法には、「ナゼ」、「ドウシテ」のような疑問詞はくることができない。

4－3．聞き手の発話・態度から推測したことを尋ねる用法

(26) 女性の声「結婚すれば、その夢は見なくなるわ」
浩介「不安なんです」
女性の声「また同じことが起きるんじゃないか……って？」
浩介「ええ」
女性の声　「大丈夫。その人は、あなたのことを愛してるんでしょ？」　(ママ)

(27) 草彅さんは何屋さんなの。
「役者じゃないんですよね、一本の人に悪い。『演じる人』ですかね。歌もコントもバラエティーも演じるとこ、同じですから」
そこでプロであると？
「プロと言われると失敗かな。アマじゃないとこにいるっていうか」　(毎日)

(26)、(27) は聞き手の先行発話または態度から話し手が推測したことが引用文になっている例である。この用法では聞き手の応答が要求される。

4－4．聞き手の先行発話・態度を受けてその真意を尋ねる用法

(28) 天「……」
佳織「……」
天「……シャワー、先に使えば？」
佳織「……さっさと帰れって？」
天「朝までにイメージまとめないといけないんだ」
佳織「いつものことだけど……」
天「悪い」　(WI)

(29) 天「この中に入ってる」と、鞄を机の上に置く。
みどり「開けろって？」
天「(首を竦め) 開けられるんだったら」

健太郎「鍵、なくしたんですか？」

天「ああ」 (WI)

(30) 「世のため、人のためになることでござる」

「ははあ……？」

「御手なみをおしめし下されたい」

「試合をせよ、と？」

「ま、そのような……」 (剣客)

(31) 阿川：浅丘ルリ子さんは入らない？

小林：あれはちょっと違うよね。その時期、一緒になってたらよかっただろうなぁと思うだけで。

阿川：「しまった」と？

小林：それはある。悔しいことをした（笑）。 (阿川)

(28) ～ (31) は聞き手の先行発話を受けて、その真意だと話し手が思ったことが引用文になっている。この用法でも聞き手の応答は要求されるが、要求の度合いは「聞き手の発話・態度から推測したことを尋ねる用法」より落ちる。(28) ～ (31) は、聞き手に「あなたの真意は～でしょう」と聞いているものであり、典型的な疑問文より確認要求の疑問文に近づいていると思われる。

4－5．想定した聞き手に話しかけるの用法

この用法は聞き手が目の前に存在しない場面においての用法であり、主に、小説またはシナリオなどの地の文の中に見られる。

(32) 由美のN「お姉ちゃんにも子供が生まれた。同じ病院で、同じ日のだいたい同じ時刻に……赤ン坊取り違え事件が起きてるんじゃないかって？残念でした、お姉ちゃんの子供は女の子なのでーす」　麻由美、弟と姪をあやす。 (う2)

(33) そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやって来た。白い象だぜ、ペンキを塗ったのでないぜ。どういうわけで来たかって？そいつは象のことだから、たぶんぶらっと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。 (銀河)

(34) 一体何が起ったのか？

峻一は鼻から出血をしたのである。たかが鼻血だって？

いやいや、それが滅多にない稀有な、ただならぬ生命にかかわるような鼻血で、一時は家族の者も色を失ったほどの特別な鼻血なのだ。 (楡上)

この場合の「ッテ」は目の前に存在しない聞き手（小説の読み手、ドラマなどの視聴者）の発話を想定し、引用文として引いている。「ト」にもこのような用法があると思われる。

4－6．発話の場より先行する別の場での聞き手の発話の内容を問う用法

(35)「あら、どうしたの、おでこ？」

喫茶店へ入って来た伸子は、純子の顔を見るなり、吹き出した。

「いやあね、笑わないでよ」

純子は、すりむいた額をこすって、「転んだのよ」

「ごめんなさい。つい……。ところで、何なの、重大な用って？」　(女社)

(36)「学生さんかと思ってたわ」

「そういうことにしてあるのよ。ね、黙ってて、私がモデルだってこと」

「分かったわ」と純子は肯いた。近くで見ると、胸の豊かさが圧倒的である。

「で、訊きたいことって？」

「え？――あ、そうそう」　(女社)

今まで見てきた「ッテ」と「ト」、「トイウト」の用法は、発話の現場においての聞き手の発話・態度に話し手が不明な点を有した場合のものであったが、聞き手を情報源とする「ッテ」の用法には、(35)、(36) のように、発話の場とは異なる場で聞き手から得た情報の内容を尋ねる用法がある。この場合の「ッテ」の文は疑問文として働き、聞き手には応答が要求される。この場合「ト」は用いられない。この用法の「ッテ」は「トハ」に置き換えることができる。

5．「トイウノカ」

聞き手を情報源とし、「トイウノカ」系列の形式が用いられた文には、二つのタイプがある。一つは、文末に「トイウノカ」という形式が用いられたタイプであり、もう一つは、引用文に疑問詞を含み「疑問詞…トイウ（ノダ）」という形を取るタイプである。

(37)「解いてもらいたいんです」

「解く？なにを」

「催眠術」

実相寺は口ひげを指先でかいた。「あんた、いま催眠術にかかってるってのか」

「はい。かけられています」　(催眠)

(38)「鹿内、俺たちは遊んでるんじゃないんだ。それに、刑事をきどってるわけでもない。…中略…」

「どこが刑事のまねごとじゃないってんだ。すっかりなりきってるじゃないか。さすが、毎年一回警視庁に派遣されてるだけのことはあるな」　(催眠)

(39)「そんな馬鹿な。ダムからどうやって脱出する。仮にそれができたとしても、この雪の中を

こんなに早くこちらまで来れるものか」二番目の声が否定した。すぐに三番目が興奮しきった声で応じる。

「じゃあ何だ。他に何があったっていう」

「まさか、倉庫に監禁してたやつらが……」今度はまた別の男だった。　（ホワイト）

この二つのタイプの文には、共通する用法もあるが、一方だけに認められる用法もある。

5－1．聞き手の先行発話を受けてその真意を問い質す用法

(40) リカ「フラれてやんの」

永尾「フラれたんじゃない」

リカ「じゃ、フッたっての？」

永尾「そーゆー問題じゃない」　（東京）

(41) 飛鳥「（見据えて）共犯者の名前です」

由紀子「（たしなめて）飛鳥さん！」

山之内「私が、誰かに妻を殺させたというのか」

飛鳥「はい」　（スチ）

(42) 係員「（深々と頭を下げ）申し訳ございません。しかし、私どもといたしましても、まったく可能性のない方をご紹介いたしましても……かえって……」

小坂先生「……私と結婚してくれる女性は誰もいないっていうんですか！？」　（う2）

(40)～(42) は聞き手の発話を受けてその真意を問い質す用法である。この用法では話し手が聞き手のものと想定したことが引用文になるが、引用文の内容は話し手にとって受け入れ難いものである。「トイウノカ」は引用文が聞き手の真意であるかどうか問い質す働きをする。この用法の「トイウノカ」は、聞き手の発話または態度に反発・抗議するといった話し手の気持ちを表すモーダルな性格を持つ。そして、疑問文の形をしてはいるが、応答を要求する度合いは、典型的な疑問文より低いと思われる。

5－2．反語の用法

反語とは仁田（1987）によれば、「疑問表現の文形式の表す肯定事態・否定事態とは逆の事態を強く主張し、それへの確認・同意を求める文である（p.190）」とある。(43)、(44) は「トイウノカ」が文末に用いられた反語の用法の例である。

(43) 「おまえさん、いまは世間と没交渉らしいじゃないか。独りで優雅な生活をおくってるって噂だぜ。それより、さっきはもう引っ越したんじゃないかと思った」

「優雅ね。このあばら家を優雅っていうんですか」彼は苦笑した。　（ひまわり）

(44)「俺にとって、これほど快適な乗り物はほかにない」嵯峨はなんなくステアリングを切りながらいった。

「これが快適だってのか。おまえのレトロ趣味は尊敬に値するよ。この車がつくられたのは俺たちが生まれたころだぞ。よく命をあずけられるな」　（催眠）

例文からも分かるように、「イトウノカ」の反語の用法は、話し手が聞き手の先行発話を受け入れられないと感じた場合に用いられる。話し手は、聞き手の先行発話の中で受け入れられないと感じたことを「トイウノカ」に前接させ、反語として文を発しているのである。5－1で見た「聞き手の先行発話を受けてその真意を問い質す用法」は、聞き手の先行発話または態度から話し手が想定したことが「トイウノカ」に前接させられたが、それとは対照的である。

「トイウノカ」文の反語の用法においてのもう一つの特徴は、以下の例のように、引用文に疑問詞が現われると必ず反語として解釈されるということである。引用文の中に疑問詞があるため、文末は「トイウノカ」だけでなく、「トイウ（ノダ）」という形式も現われる。

この用法は聞き手が存在する場面だけでなく、聞き手が存在しない場面でも用いられる。

－聞き手が存在する例

(45)「どうしても式で演奏したかったんですね」

「当然じゃないですか。塩原一郎の音楽葬ですよ。私以外の誰が弾くというんですか」

薫はもう一度ピアノを眺めた。　（古畑）

(46)「どうしてダメなんですか」

「そういう決まりなんだ、しかたないだろ」

「でも」と公平が言ったとき、いつの間にか牛丸の部屋に入ってきていた舞子が、ダダッと二人の間に割って入ると訴えるように言った。

「部長、逮捕歴がなんだっていうんですか？久利生さんは誰よりもちゃんと仕事してるじゃないですか！」　（hero）

(47) 青島「何で所轄に情報おりてこなかったんです？」

室井「……わたしの責任だ……」

青島「おれは今日まであんたの下で働いていると思ってやってきた……上がそんなことして、現場のおれたちに何しろって言うんだ、室井さん……」

室井「……」　（踊る大）

(38)「鹿内、俺たちは遊んでるんじゃないんだ。それに、刑事をきどってるわけでもない。…中略…」

「どこが刑事のまねごとじゃないってんだ。すっかりなりきってるじゃないか。さすが、毎

年一回警視庁に派遣されてるだけのことはあるな」　（催眠）

(39)「そんな馬鹿な。ダムからどうやって脱出する。仮にそれができたとしても、この雪の中をこんなに早くこちらまで来れるものか」二番目の声が否定した。すぐに三番目が興奮しきった声で応じる。

「じゃあ何だ。他に何があったっていう」

「まさか、倉庫に監禁してたやつらが……」今度はまた別の男だった。　（ホワイト）

(48)「じゃあ、おまえは部隊長と笠原が……」

「想像だけでものを言うのはやめろ。証拠がどこにあるって言う」　（ホワイト）

会話文における反語の用法は、「聞き手の先行発話を受けてその真意を問い質す用法」と同じように聞き手の発話または態度に反発するとか抗議するといった気持ちを表すモーダルな性格を持つ。

－聞き手不存在の例

(49)「ADと一緒に何やってるのよ」

「時間を計ると言ってました」駐車場までADを走らせてみようというのだろうか。今さら実験したところで、何が分かるというのか。　（古畑）

(50) ちなみは愕然とした。誰も訪ねてくる予定などなかった。山奥で、しかも外は大雨。こんな夜に一体誰が来るというのか。再びドアチャイム。　（古畑）

(51) 仮に心臓の鼓動が戻った場合には、当然のことながら、血液が全身に循環していく。傷口が開いたままでは、そこから血液が流れ出るだけではないか。岩崎の胸を押せば、残った血液を体から絞り出すも同じことになる。だが、他にどうすればいいという。

トンネル内の非常電話は使えない。外部と連絡を取るには、下流の大白ダムまで雪の中を歩く必要がある。　（ホワイト）

(52) 救いようのない事実が、厳然と目の前に突きつけられた。あの日、吉岡と二人で救助しようとした、もう一人の遭難者に間違いなかった。

何ということだ。

自分と吉岡が、何をしたという。どうして、こんな手ひどい、救いようのない悪戯をする。

富樫は神を呪った。　（ホワイト）

聞き手不存在の場面においての反語の用法は、直前に述べられている状況を書き手が受け入れられないと感じた場面で用いられ、直前に述べられている状況に対して、書き手が反発・抵抗する気持ちを持っていることを表す働きをする。

6．まとめ

本稿で考察を行った文末の「ッテ」、「ト」、「トイウト」、「トイウノカ」等の形式は、引用形式として働きながら、なおかつ、聞き手の先行発話または態度を話し手がどう捉えているかという面においてモーダルな性格も併せ持っている。「ッテ」と「ト」は、単に聞き手の発話の中でもっと詳しい情報が必要な場合に用いられる疑問文としての用法から、聞き手の発話または態度に反する話し手の気持ちを表す述べ立てに近い用法まで連続的に現れるが、「トイウノカ」は、主に話し手が聞き手の発話または態度に反発・抗議する気持ちを表したい場合に用いられる。

《用例出典》

（あす）井上靖『あすなろ物語』新潮文庫、（東京）柴門ふみ原作、坂元裕二脚本『東京ラブストーリー』TV版シナリオ集　小学館、（奇跡）真保裕一『奇跡の人』新潮文庫、（催眠）松岡圭祐『催眠』小学館文庫、（忍ぶ）三浦哲郎『忍ぶ川』新潮文庫、（hero）脚本：福田靖ほか、ノベライズ：白崎博史『HERO』フジテレビ出版、（オーバー）北川悦吏子『オーバー・タイム』角川文庫、（ドナウ・上）宮本輝『ドナウの旅人（上）』新潮文庫、（ブン）井上ひさし『ブンとフン』新潮文庫、（瞬上）沢木耕太郎『一瞬の夏（上）』新潮文庫、（ス4）伴一彦シナリオ「スチュワーデス刑事・4」、（楡下）北杜夫『楡家の人びと（下）』新潮文庫、（楡上）北杜夫『楡家の人びと（上）』新潮文庫、（女社）赤川次郎『女社長に乾杯』新潮文庫、（剣客）池波正太郎『剣客商売』新潮文庫、（ママ）伴一彦シナリオ「ママのベッドへいらっしゃい」、（世界）村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮文庫、（WI）伴一彦シナリオ「WITH　LOVE」、（阿川）阿川佐和子『阿川佐和子のアハハのハ　この人に会いたい2』文芸春秋、（う2）伴一彦シナリオ「うちの子にかぎって…2」、（銀河）宮沢賢治『銀河鉄道の夜』新潮文庫、（ホワイト）真保裕一『ホワイトアウト』新潮文庫、（スチ）伴一彦シナリオ「スチュワーデス刑事」、（ひまわり）藤原伊織『ひまわりの祝祭』講談社文庫、（古畑）三谷幸喜『古畑任三郎1』扶養社、（踊る大）君塚良一『踊る大捜査線－湾岸警察署事件簿』キネマ旬報社、（孤高）新田次郎『孤高の人』新潮文庫、（毎日）『毎日新聞』97年12月1日［夢の現場で］離婚ドラマで熱演、草彅剛忍耐が作る厚い皮

※伴一彦シナリオは「http : //www.plala.or.jp/ban/script.html」からダウンロードしたものである。

《参考文献》

安達太郎1989「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』8－8明治書院

金　善眞2001『話し言葉における文末の引用形式について』岡山大学大学院文学研究科

許　夏玲1999「文末の「って」の意味と談話機能」『日本語教育』101

砂川有里子1987「引用文の構造と機能－引用文の３つの類型について－」『文藝言語研究　言語篇』13　筑波大学　文芸・言語系

仁田義雄1987「日本語疑問表現の諸相」小泉保教授還暦記念論文集『言語学の視界』大学書林

野村真一2000「「Sって文」伝聞用法の分析」『金沢大学語学・文学研究第28号』

三枝令子1997「「って」の体系」『言語文化』34　一橋大学

メイナード・K・泉子1994「「という」表現の機能－話者の発想・発話態度の標識として」『言語』23－11大修館書店

守時なぎさ1994「話し言葉における文末表現「ッテ」について」『筑波応用言語学研究』1

藤田保幸2000『国語引用構文の研究』和泉書院

【付記】この論文は、2001年度に岡山大学大学院文学研究科に提出した修士論文（『話し言葉における文末の引用形式について』）に基づく。